



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4431 号 2018.6.10 発行

### 音楽通じ日韓交流 知的障害者らが合同コンサート

神戸新聞 2018年6月9日

歌に合わせ、手話の練習をする両国のメンバーら＝神戸市中央区雲井通5



日韓の知的障害者グループが共演する「はっぴい・みらくるライブ日韓交流コンサート」（神戸新聞社後援）が10日、神戸市兵庫区新開地5の神戸アートビレッジセンターで開かれる。

NPO法人「あんだんてKOB E」が主催し、韓国の劇団「ラハブ」も出演する。

あんだんてKOB Eは、知的障害者を対象に音楽を通した余暇活動を2003年から支援しており、10年にNPO法人として認可を受けた。現在は11人の知的障害者が支援を受けて活動。ライブ演奏や放課後デイサービスなどへの訪問をしている。

ラハブは韓国のナザレ大学リハビリテーション自立学科に所属する発達障害のある学生や、その保護者らが16年に立ち上げた。金在恩団長（51）によると、劇団の4年生が卒業することもあり「活動の集大成として日本公演の経験をさせたい」と、大学などを通じてあんだんてKOB Eに依頼した。コンサートでは、バンド演奏やダンス披露のほか、自作ミュージカルの劇中で流れ、劇団メンバーの経験を曲にした「私の夢は、あなたの夢は」を歌う。

最後に、日韓の知的障害者がともに歌って踊る場面もあり、金団長も「一生懸命するのて温かく見守って楽しんでほしい」とほほ笑む。あんだんてKOB Eの和泉裕子理事長（62）は「これを契機に活動への理解がより広がっていけばと思う」と話した。

午後3時半開場。入場は無料で、予約不要。神戸アートビレッジセンターTEL078・512・5500（篠原拓真）

### 「想い」のびのびと 特別支援学校、卒業生の書道展

東京新聞 2018年6月9日

思いのこもった書が並ぶ昨年の作品展＝文京区で（悠友書道会提供）



都内の特別支援学校の卒業生による書道展「悠友書道会作品展」が十五～十七日、文京区春日の文京シビックセンターで開かれる。のんびりと自由に書かれた書道を楽しく鑑賞できる毎年恒例の催しだ。

十回目の節目となる今年は、肢体不自由や知的障害がある二十六～三十歳の八人や講師による五十九点を展示。「ひなたぼっこ」

や「妹」など自由に書いた言葉や文字のほか、それぞれが気になる木を書いたコーナーを設け、「柊（ひいらぎ）」や「梨」といった漢字を並べる。昨年十一月に韓国の国際交流展で展示された「蛙（かえる）」もある。

悠友書道会は二〇〇八年六月に、都内の特別支援学校生徒を対象にした夏の書道教室に参加したメンバーらで発足。毎月一回、港区芝の障害者福祉会館でのびのびと書道を楽しんでいる。

山田真由美代表は、「作品には心に訴える力があり、『文字に託した想（おも）いが伝わりほっとする』といった声も聞く。そんな温かい励ましで十年間続けてこられた。本人が活躍できるだけでなく、障害者への理解や交流の場になっている」と、意義を強調する。

入場無料。問い合わせは、山田代表＝電03（3821）5950＝へ。（中村真暁）

## スポーツ庁の鈴木長官が田川市と嘉麻市を視察 障害者取り巻く環境を把握【福岡県】

西日本新聞 2018年06月09日



嘉穂特別支援学校で風船バレーを楽しむ参加者たち  
全日本車いすフェンシング選手権大会に出場する加納慎太郎選手を激励する鈴木長官（左）  
スポーツ庁の鈴木大地長官が8日、田川市と嘉麻市で障害者スポーツの



取り組みを視察した。バリアフリーのまちづくりや健常者と障害者の共生社会の実現に向けた自治体の実践例を知るのが狙い。

田川市伊田の市総合体育館では、車いすのまま入れる多目的トイレやシャワールームなどを見学した。同市では2020年東京五輪・パラリンピックに向け、車いすフェンシングのドイツ選手団が事前キャンプを予定。市は、体育館の観覧席に行くためのエレベーターを新設したり、車いす専用の駐車スペースを増やしたりする計画を説明した。

同体育館では9日から、全日本車いすフェンシング選手権大会が開かれる。鈴木氏は、加納慎太郎選手＝福岡市出身＝や阿部知里選手らを「最高のパフォーマンスができるよう頑張ってください」と激励した。

その後、嘉麻市鴨生の県立嘉穂特別支援学校を訪問。月1回、放課後に体育館を開放し、児童や障害者らの交流の場となっている「放課後スポーツ教室」で、約20人と風船バレーなどのスポーツで触れ合った。

同校は17年度、スポーツ庁から、学校を障害者スポーツの場として活用する「スポーツ活動実践事業実施校」の指定を受けた。地元のスポーツ団体が昨年から放課後スポーツ教室を運営し、飯塚市や桂川町の障害者も受け入れている。

鈴木氏は「草の根で障害者スポーツの輪を広げる好事例だ」と評価。「体を動かす喜びは誰もが持っている。障害者がスポーツを楽しめる機会をさらに作っていくとともに、指導者のサポートにも力を入れたい」と話した。

鈴木氏は筑豊での視察に先立ち、大野城市で講演。県内の市町村職員を前に、スポーツを活用した地域活性化などについて話した。

災害急行のキャンピングカー 被災地支援の拠点に 神戸新聞 2018年6月9日  
災害時に各地からのボランティア希望を調整し、手助けを必要とする被災者への派遣な

どを担う「ボランティアセンター（ボラセン）」として、キャンピングカーを活用する準備が兵庫県内で進められている。現地の公的機関がボラセンを立ち上げるまでの間、高齢者や障害者らへの支援の空白を埋めるのが狙い。数々の被災地を訪れた兵庫県内のボランティア団体と、災害支援に取り組む財団法人や社会福祉法人がタッグを組んだ兵庫発の取り組みで、「全国的にも聞いたことがない」とする。（太中麻美）



災害時に「移動式ボランティアセンター」として活用される  
予定のキャンピングカー＝三木市志染町青山1

災害用の器具の説明を聞く学生＝三木市志染町青山1

シニア世代  
のボランティ  
ア経験者らで  
つくる「ひょう  
ご災害ボラン  
ティアシニア  
クラブ」（高橋



守雄会長）が発案した。高橋会長は2013年9月、台風18号で豪雨被害を受けた京都府福知山市に入った際、独居の高齢者が1人で家具を運んだり、泥かきをしたりする姿を目の当たりにし「必要な人たちに支援が届いていない」と痛感した。

ボラセンは地元の社会福祉協議会などが設置するが、職員自身も被災していることなどから、始動まで3日程度かかるケースが多い。その間、全国からのボランティアの受け入れや支援活動ができない状況が、東日本大震災をはじめ災害のたびに繰り返されている。

構想では災害直後にキャンピングカーで急行し、車中泊しながらボランティア活動の取りまとめや支援を行う。現地のボラセンが立ち上がった段階で、要支援者の情報などを引き継ぐ。

車両は、災害支援などに取り組む「大吉財団」（神戸市中央区）所有のキャンピングカーを活用。非常用電源や炊き出し用の調理器具、スコープやドローンなどの資機材を備え、「災害ボランティア号」と命名した。同財団が被災地に赴く際は社会福祉法人「きらくえん」（同）も協力し、車いすのまま乗り降りできる福祉車両を現地派遣する。

さらに機能を充実させようと、8日には同クラブの高橋会長や同財団関係者らが関西国際大学（三木市）で車両を披露。防災を学ぶ学生らに見学してもらい、「チェーンソーや薬品も必要」「回転灯で存在を知らせては」などの新しいアイデアが出された。

**障害理由に不妊手術を強制 神戸の夫妻が実名公表し証言** 神戸新聞 2018年6月9日



「声を上げられる仲間が増えれば」。不妊手術を強いられた体験を実名で証言することを決めた高木賢夫さん（左）と妻の妙子さん＝神戸市内

旧優生保護法（1948～96年）の下で、聴覚障害を理由に不妊手術を強いられた神戸市内の夫婦が実名を公表して証言する決意を固めた。これまで神戸新聞などの取材に匿名で応じてきたが、子どもを産むという自己決定権が二度と奪われることのないように、そして「声を上げられる仲間が増えるように」との思いから決断した。9日、大阪市内で全日本ろうあ

連盟が開く会見に出席し、手話で体験を伝える。（田中陽一、田中宏樹）

高木賢夫（たかお）さん（79）と、妻の妙子さん（77）。神戸ろうあ協会の活動を通じて知り合った2人は68年4月に結婚した。

だが実は、それぞれの両親が秘密裏に決めた結婚の条件があった。それが「子どもを産

まないこと」だった。賢夫さんは結婚の数カ月前、目的も聞かされないまま病院へ連れて行かれ、その日のうちに手術を受けさせられた。

妙子さんが賢夫さんから手術の知らせを聞いたのは、ちょうど出産について考え始めた時期だった。「悲しかったし、悔しかった」。当時の心境を手話で訴える。

以来約50年間、誰にも打ち明けてこなかったが、今年に入り宮城や東京、北海道で国に損害賠償を求める訴訟の動きが活発化した。高木さん夫婦も5月、兵庫県聴覚障害者協会などが被害の実態調査に向けて開いた学習会で、初めて人前で体験を明かした。すると「実は私も…」という仲間が出始めた。

そうした流れも「実名で証言する後押しになった」と賢夫さん。妙子さんも「同じ過ちが繰り返されてはならない」と強調する。全国ろうあ者大会に合わせて開かれる9日の会見では、こうも訴えるつもりだ。「障害の有無にかかわらず、対等に生きられる社会にしたい」

### 強制不妊手術 超党派立法PT「来年通常国会で法案提出」 毎日新聞 2018年6月8日 初会合で確認

旧優生保護法（1948～96年）下で行われた障害者らへの不妊手術の問題を考える超党派議員連盟の法案作成プロジェクトチーム（PT）は8日、初会合を開き、来年の通常国会での法案提出を目指すことを確認した。国会としての謝罪の時期や方法についても議論する。

会合には与野党のメンバー11人全員が出席。今後、ハンセン病や薬害肝炎など国による被害について、政治判断で救済が行われるまでに生じた問題や経緯などについて関係者にヒアリングするという。

同法を巡っては、与党にもワーキングチーム（WT）があり、来年の通常国会での法案提出という目標は一致している。

PTの事務局次長を務める立憲民主の初鹿明博衆院議員は「与党WTの方向性を見ながら、我々も大きなズレのないように検討していく」と述べ、与党と連携する姿勢を示した。  
【藤沢美由紀】

### <強制不妊手術>岩手県362件 さらに1000施設調査へ

河北新報 2018年6月9日

旧優生保護法（1948～96年）下で、知的障害などを理由に不妊・避妊手術が繰り返されていた問題で、岩手県は8日、県内で少なくとも362件の強制手術が行われていたとみられると発表した。県衛生年報の統計で確認した。

県子ども子育て支援課によると、50～62年の衛生年報に優生保護審査会が決定した手術の件数が記載されていた。理由の詳細や個人名は記されていない。

49年以前と63～84年は年報に手術件数の記載がなかった。85年以降の手術件数は0件だった。

不記載の期間が長いことから県は「全体の実態はまだ把握できていない」と判断。新たに6～7月、県内の医療機関や障害者支援施設など約1000施設を対象に関連文書の保有状況を調べる。

県は今回、国の照会に基づいて県庁や各保健所などで関連資料を調査した。県年報の他は保健所年報の一部しか見つからなかった。

旧厚生省の年報や優生保護統計では、岩手県であった手術は50～62年の284件となっていた。県は「国と県で件数が異なっている理由は分からない」としている。

## 旧優生保護法 強制不妊手術で県調査 個人特定資料なし /岩手

毎日新聞 2018年6月9日

旧優生保護法（1948～96年）の下で障害者らへの強制的な不妊手術が行われていた問題で、県は8日、厚生労働省からの依頼に基づき、保健所や広域振興局など県に属する行政機関を調査した結果、個人の特定につながる資料はなかったと発表した。県は今後、医療機関などに対象を広げて独自調査を実施する。

県内の保健所や広域振興局など計22機関を対象に、同法で作成が定められている資料や、優生手術関連の件数などを調査。その結果、毎日新聞の報道で判明した、50～62年に計362件の手術が実施されていた記載のある県の衛生年報のみ確認した。

県は実態把握の参考とするため、今月下旬から、県内の病院や診療所、児童養護施設など計1074施設を対象に調査を実施する。【佐藤慶】

## 石川) 生きづらさをはき出そう 成宮さんら朗読ライブ 朝日新聞 2018年6月9日

生きづらさを抱える人が自由に本音をはき出せるライブイベント「ポエトリーリーディング&オープンマイク in 金沢」が17日午後2時から、金沢市石引2丁目の石引パブリックで開かれる。東京を拠点に活動する朗読詩人の成宮アイコさんらが出演。詩や弾き語り、踊りなどで心の叫びを表現するオープンマイクの参加者も募っている。

成宮さんは不登校や「社会不安障害」と診断された経験があり、赤い紙に書いた生きづらさと人間賛歌をテーマにした詩や短歌を読み捨てていくパフォーマンスで知られる。ピアノとボーカルは、朗読や劇の伴奏なども手がけるシンガー・ソングライターの青山祐己さんが担当する。

「あなたの言葉が聞きたい」と題した参加型企画のオープンマイクでは、5分程度の持ち時間で自由に心の叫びを表現できる。金沢市の訪問看護師、中島江理子さんは「幅広い方に来ていただき、生きづらさを抱える人たちの言葉を感じてほしい。つながりの場になってくれたら」と話す。

事前予約1500円、当日2千円（ドリンク代は別）。予約は氏名、参加人数、連絡先、オープンマイク参加希望の有無を書き、メール（dharma218617@gmail.com）へ。（浅沼愛）

## 地域の介護支える 気仙沼圏域で働く新入職員が決意 河北新報 2018年6月9日

新入職員を代表して決意を述べる及川さん

気仙沼圏域で働く介護職員の合同入職式が6日、気仙沼市市民福祉センター「やすらぎ」であり、同市と宮城県南三陸町の介護関連施設に2017、18年度中に就職した23人が出席した。

昨年からの市内のグループホームで働く佐藤瞳美さん（19）が先輩職員としてあいさつ。「利用者一人一人の状態に合わせて支援するのは大変だが、基本の声掛けが大切」と助言した。

新入職員を代表し、市内の特別養護老人ホームに就職した及川夏穂（かほ）さん（20）が「中学生の頃、デイサービスを利用する祖母を介助する職員を見て、介護の仕事をしたと思った。一日も早く信頼されるようになりたい」と決意を述べた。

入職式は、気仙沼圏域介護人材確保協議会（木村伸之会長）が、仕事への意欲向上や、職場の枠を超えた連携を強めようと昨年からは開いている。協議会は気仙沼圏域の慢性的な介護関連人材の不足を解消しようと、市や県、気仙沼介護サービス法人連絡協議会などが



16年に設立した。

### 障害者 地域と共に 登米で交流会



河北新報 2018年6月9日

#### 障害者が地域で普通に暮らせる社会について意見を交わした交流会

障害がある子どもたちの放課後の居場所づくりなどに取り組むNPO法人奏海（かなみ）の杜（もり）（登米市）は5月25日、宮城県登米市中田生涯学習センターで、講演会と交流会「共に生きる地域のかたち」を開いた。

登米市や南三陸町の障害者の家族、地域住民ら21人が参加。社会福祉法人そうそうの杜（大阪市）の荒

川輝男理事長が、大阪市城東区で重度の障害がある人でも施設に入所せずに、障害者福祉制度の生活支援などを利用して賃貸住宅などで暮らしている事例を紹介。学校や行政、事業所、地域住民の連携の必要性を説いた。

交流会では4グループに分かれて、登米市の障害者がどのようなサービスを受けているかなどについて意見を交わした。障害のある子どもたちによる踊りの舞台発表もあった。

奏海の杜の太齋京子理事長は「大阪の事例を参考に、障害があっても楽しく地域で生活できる社会を登米市でもつukれないかと思う。地域住民の協力を呼び掛けていきたい」と話した。

### ADHD治療薬、子どもへの処方率は0.4% 岡崎明子 朝日新聞 2018年6月9日

18歳以下の子どもの0.4%に、発達障害の一つ、注意欠如・多動性障害（ADHD）の薬が処方されていることが、東京都医学総合研究所の奥村泰之主席研究員らの研究チームの調査でわかった。米国に比べると低い、英国などとほぼ同じ割合だった。有病率は各国ともほぼ同じため、処方率は医療機関へのアクセスや、認められている薬の種類などの影響を受けている可能性があるという。

研究チームは、18歳以下でADHD治療薬を処方された人の診療報酬明細書（レセプト）を厚生労働省のデータベースをもとに解析。2014年度は約8万7千人分あったという。この年代の人口は約2100万で、処方率は0.4%。過去に例がない大規模調査になった。

年齢別では男女とも7～12歳が高く、この世代の男子は1.3%だった。処方率は米国（5.3%）に比べると低く、イタリア（0.2%）や英国（0.5%）とほぼ同じだった。

### 全国初「里親休暇制度」導入へ 明石市、年5日を上限に 産経新聞 2018年6月9日

児童養護施設などに入所する子供を養育する「里親制度」を普及させようと、兵庫県明石市は一時的に子供を預かる市職員を対象に、年5日を上限とした「里親休暇制度」の導入を決め、8日開会の6月市議会に関連条例の改正案を提出した。最終日の29日に可決される見込みで、7月から施行する。市によると、こうした取り組みは全国で初めて。

市によると、里親休暇制度は、災害時の被災者支援や福祉施設での活動を対象にした従来のボランティア休暇（年5日）の対象を広げる形で導入。市職員の勤務時間などに関する条例を改正し、ボランティア休暇の項目に里親の活動を加える。

制度の対象として想定するのは、児童養護施設などで暮らしている子供を数日間、家庭に迎える「ボランティア里親」。夏期や年末年始の休暇と組み合わせることで、受け入れた子供たちに寄り添う時間を確保できるようにする。また、里親になるための研修は平日開

催が多いため、勤務日にも研修を受けられるよう規則を改める。

今年4月に中核市に移行した同市では、来年4月に児童相談所を開設予定で、市内の里親登録数を増やしていく方針。市の担当者は「里親への理解のため、まずは市職員が率先して実施していきたい」と説明している。

## 5歳女児死亡 免疫機能の「胸腺」萎縮 長期間の虐待ストレスか

NHKニュース 2018年6月9日

東京 目黒区で5歳の女の子に十分な食事を与えず死亡させたなどとして両親が逮捕された事件で、警視庁が女の子の遺体を調べたところ、免疫の機能に関わる臓器が通常の5分の1程度に縮んでいたことがわかりました。この臓器の萎縮は、繰り返し虐待を受けた子どもにみられる特徴だということで、警視庁は女の子が長期間の虐待によるストレスにさらされていたとみて調べています。

ことし3月、東京・目黒区の船戸結愛ちゃん（当時5）が死亡し、警視庁は、父親の船戸雄大容疑者（33）と母親の優里容疑者（25）が十分な食事を与えなかったうえ病院にも連れて行かずに死亡させたとして、保護責任者遺棄致死の疑いで逮捕しました。これまでの調べで、結愛ちゃんの食事は1食につきスープ1杯か、おわんに半分のご飯とみそ汁などしか与えられていなかったということです。

警視庁が遺体を詳しく調べたところ、免疫の機能に関わる「胸腺」という臓器が同年代の子ども5分の1程度に縮んでいたことが捜査関係者への取材でわかりました。

この臓器の萎縮は繰り返し虐待を受けた子どもに多くみられる特徴だということです。

警視庁は結愛ちゃんが長期間、栄養が足りない状態で虐待によるストレスにさらされていたとみて調べています。

### （社説）子どもの虐待 残されたノートに誓う

朝日新聞 2018年6月9日

懸命に生きていた幼い命を、何とか救う機会はなかったか。自治体、児童相談所、警察の対応に問題はなかったか。検証すべきことがたくさんある。

船戸結愛（ゆあ）ちゃん（5）がノートに書き残した内容が、社会に大きな衝撃を与えている。親にいいつけられたことをできなかった「反省」と「謝罪」が、ひらがなでつぶられていた。食事を満足にさせてもらえなかったといい、3月に亡くなった。

以前住んでいた香川県で、結愛ちゃんは父親の暴力を理由に2回、児相の一時保護を受けた。まず思うのは、この時点で児童養護施設などに入所させて親と距離を置く判断はできなかったか、ということだ。

一家は今年1月下旬から東京都目黒区で暮らし始めた。

香川からの連絡で、東京の児相もリスクを抱えた家庭であることを把握。2月に家庭訪問して様子確かめようとしたが、本人に会えなかった。母親の様子から児相と距離を置きたがっていると判断し、関係づくりを優先しようと考えたという。

子どもを守るため、直ちに権限を行使して親と引き離すべきか。それとも親との信頼関係を粘り強く築き、虐待をやめさせるよう支援を続けるほうが、その子のためになるか。児相にとって難しい判断だろう。

ただ、結愛ちゃんは東京では幼稚園などに通っていなかった。第三者の目が届かない環境にずっといては異変を察知しようがない。この事例では、児相は警察の協力を得て、家庭への立ち入り調査に踏み切るべきだった。そうみる専門家もいる。

香川と東京の児相の間で、どんな引き継ぎがなされていたのか。深刻さはどの程度共有されていたのか。警察とはどう連携をとるべきだったのか。

有識者でつくる都の児童福祉審議会などで、事実の経緯と関係者の認識を解き明かし、教訓を導きだしてもらいたい。

児相の業務の多忙さはかねて指摘されている。問題家庭と向き合う児童福祉司の人数はこの10年間で1・4倍になったが、その間に相談件数は3・3倍になった。努力にも限界がある。今回の事件を受けて、小池百合子都知事は児相の増員と専門職の育成を表明した。むろん都だけの問題ではない。国をあげて取り組みを急ぐべきだ。

「ほんとうにもうおなじことはしません」。結愛ちゃんはノートにそうつぶっていた。謝るべきは大人社会のほうだ。失われた命に再発の防止を誓い、虐待されているすべての子を、救い出さなければならない。

## 社説：秋葉原事件10年 誰も追い詰めぬ社会を

中日新聞 2018年6月9日

人々を孤立させ、追い詰める社会への警告だったのかもしれない。東京・秋葉原の無差別殺傷事件から十年。犠牲者の無念を胸に刻み、同様の悲劇が繰り返されない社会のありようを探り続けたい。

「車でつっこんで、車が使えなくなったらナイフを使います みんなさようなら 時間です」

十年前の六月八日。二十五歳だった加藤智大死刑囚はインターネットの掲示板にそう書き込み、歩行者天国で十七人を殺傷した。残虐な行動は、もとより厳しく断罪されねばならない。

犯罪史に残る事件がなぜ発生したのか。十年後の私たちにもくみ取るべき教訓はないか。

事件の背景に浮かんだのは、ありのままの自分を認め、受け止めてくれる居場所が見つからなかったことへのいら立ちだった。

家庭は母親に支配されていた。子どもの幸せのためとして、自尊心を傷つけてまで名門高校、有名大学、一流企業へなどと、親の願望を強いることを「教育虐待」とも今は呼ぶ。その犠牲になった。

意思疎通を欠いた環境で育った影響だろうか、怒りを言葉ではなく行動で示すようになった。仕事を転々としたのもそのためだった。裏返せば、自分を認めてほしいという欲求だったに違いない。

不安定な非正規雇用の生活を送り、彼にとっては、自分を取り換えの利く部品として扱う現実「建前」、真の自分でいられるネットは「本音」の世界だった。

その大切な空間が嫌がらせで破壊され、犯行の引き金になっていく。裁判はそのように認定した。

現代の競争社会で孤立し、生きづらさを抱える人々にも、同じような苦悩があるのではないか。無差別殺人はなお後を絶たない。

家庭や学校、職場、地域、ネットといった空間を問わず、常に評価のまなざしにさらされ、時に大きな格差を意識させられる。成績や学歴、職業、地位、収入…。自分は不要とされないか。不安感や閉塞（へいそく）感は強まっている。

誰も追い詰められない社会へ、築き直さねばならない時期なのかもしれない。社会の中でつながりを紡ぐのが難しく、孤独に埋没しがちな人々が多くいるという現実をまずは認識したい。

ベストセラーの『君たちはどう生きるか』（吉野源三郎著）は語る。「人間が人間同志（どうし）、お互いに、好意をつくし、それを喜びとしているほど美しいことは、ほかにありはしない」。今日にも相通ずるのではないか。

